

氏 名 香川 雅信

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大乙第 163 号

学位授与の日付 平成 18 年 9 月 29 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 日本人の妖怪観の変遷に関する研究－近世後期の「妖怪娯楽」
を中心に－

論文審査委員 主 査 助教授 山田 奨治
教授 稲賀 繁美
教授 小松 和彦
教授 常光 徹
名誉教授 高田 衛（東京都立大学）

論文要旨

題名「日本人の妖怪観の変遷に関する研究—近世後期の「妖怪娯楽」を中心に—」

本論文は、近世の 18 世紀後半、および近代において、日本人の妖怪に対する認識が大きく変容したことを明らかにすることを目的とする。特に、近世において妖怪が娯楽の対象となっていた事実に注目し、妖怪手品、妖怪図鑑、妖怪玩具、からくり的といった具体的な題材を取り上げながら、それらを成立させた妖怪観の変容について考察することを中心とする。

序章「妖怪の研究史と本稿の視点」では、これまでの妖怪研究の流れを概観し、総論の不足、文化史的視点の欠如、民間伝承のなかの妖怪とフィクションのなかの妖怪の関係性についての考察の不足、妖怪と娯楽とのかかわりについての考察の不足といった問題点を指摘する。それに対し本稿では、認識枠組の変容として文化史を描き出す「アルケオロジー」の手法を用いて、フィクションとしての妖怪、娯楽の対象としての妖怪を生み出した妖怪観の変容を明らかにすることを主張する。

第 1 章「安永 5 年、表象化する妖怪——18 世紀後半における妖怪観の転換」では、安永 5 年（1776）に刊行された鳥山石燕『とりやませきえん 画図百鬼夜行』、平賀源内『てんくしなれこうべめきまんぎ 天狗髑髏鑿定縁起』、上田秋成『雨月物語』、恋川春町『そのへんぼうはけものばなし 其返報怪談』といった文芸作品を検討し、それらが人為的に作り出された「表象」としての妖怪観に基づいた作品であったことを明らかにする。そして、民間伝承における妖怪が、怪異の「概念化による説明」という機能を担っていたのに対し、「表象」としての妖怪は「視覚化による感情操作」という機能を担っていたという仮説を提示する。

第 2 章「妖怪の作り方——妖怪手品と『種明かしの時代』」では、同じく 18 世紀後半に登場した「妖怪手品」（妖怪を出現させる手品）について検討し、それが妖怪現象を合理的に解釈したうえで、人工的に妖怪を作り出す娯楽であったことを明らかにする。さらに、この「妖怪手品」に見られるように、18 世紀後半が不思議なものの背後に隠された仕組みを白日のもとにさらそうとする「種明かしの時代」であり、その背景に、貨幣の論理による神霊との関係の再編があったことを明らかにする。

第 3 章「妖怪図鑑——博物学と『意味』の遊戯」では、『画図百鬼夜行』という「妖怪図鑑」が生み出された背景に、18 世紀後半における博物学的思考／嗜好の広がりがあったこ

とを明らかにし、それがかつて「記号」として存在していた妖怪を「生物」としての妖怪に変え、また視覚的特徴と名前によって弁別される「キャラクター」へと変換していったことを論証する。さらに「妖怪図鑑」が「見立て」という一種のパロディと容易に結びついたという事実から、博物学と言葉遊びとが「物」と「意味」との固定的な関係の解体という同じ認識論的基盤に基づいたものであることを明らかにし、これらが人工的な記号である「表象」を生み出す「知」であったことを指摘する。

第4章「妖怪玩具——遊びの対象としての妖怪たち」では、化物双六、妖怪カルタ、おもちゃ絵、亀山の化物、妖怪花火、妖怪凧といった「妖怪玩具」について検討し、それらが①博物学的傾向、②「変化」の玩具化、③「驚き」の喚起という、視覚性に基づいた三つの特徴を持っていることを明らかにする。また、妖怪の人形など立体的な「妖怪玩具」が少ないことにも注目し、モノとしての質量を持つ人形は神秘性やリアリティを感じさせてしまうため、娯楽よりもむしろ信仰と結びついたのではないか、という仮説を提示する。

第5章「からくり的——妖怪を笑いに変える装置」では、「からくり的」という遊戯施設を例として、妖怪がいかにして人間の「笑い」と結びつき、娯楽の対象となるのかを考察する。妖怪は、そのアノマリー性、および「過剰な肉体性」によって、恐怖と笑いという両価感情的な強い情動反応を呼び起こすすぐれた「象徴」であり、「からくり的」をはじめとする「妖怪娯楽」は、その象徴特性を利用して「快楽」を引き出すものであったことを明らかにする。また、「からくり的」の歴史的変遷についても検討し、それが妖怪の「変化する」という特徴を遊戯化したものから、数多くの妖怪を出現させるという博物学的関心に基づいたものへと変化していったことを明らかにする。

最終章である第6章「妖怪娯楽の近代——『私』に棲みつく妖怪たち」では、近代においてふたたび妖怪観の転換が起こり、それによって妖怪娯楽が変質していくさまを描き出す。かつて「表象」として外在化され、人間のコントロール下に置かれていた妖怪が、今度は人間自身にはコントロールできない「内面」の働きによって「見てしまう」ものへと変貌していくのを、「神経」「催眠術」「心霊」という三つのキーワードを通じて検討する。そして近代における妖怪的なものごとが、こうした認識の変容によって生み出された「私」という特異な観念と結びついて発達していったことを指摘し、その延長線上にある現代のオカルトブームや妖怪ブームについても考える。

論文の審査結果の要旨

申請者、香川雅信氏より学位請求があった博士論文「日本人の妖怪観に関する研究—近世後期の『妖怪娯楽』を中心に—」は、これまで必ずしも明確にならなかった近世後期の妖怪文化について、はじめて理論的に包括した研究である。最近10年ほどのあいだに進展した妖怪文化研究の成果を方法論的に吟味・批判しつつ、ミシェル・フーコーの「知のアルケオロジー」に倣って中世・近世・近代それぞれの特徴を整理し、取り分け18世紀後半に、日本人の妖怪観に大きな変更があったことを新たに指摘し論じた。

その学術的成果の第1は、18世紀後半の江戸・上方で流行した庶民の娯楽の世界に豊富な妖怪文化が華開いたことを、具体的に論じたことである。すなわち、怪しい〈体験〉と、妖怪という〈記号〉が一体となった中世的な妖怪観から、〈記号〉が〈体験〉から切り離され、「表象空間」に広がった妖怪を楽しむ妖怪観へと転換したことを指摘した。取り分け、鳥山石燕『画図百鬼夜行』、平賀源内『天狗鬮鑒定縁起』、上田秋成『雨月物語』、恋川春町『其辺報怪談』が刊行された安永5年（1776）がその象徴的な年であることを論じた。こうした転換の背景には、出版文化の興隆と貨幣経済の発達があり、奉納に対する御利益という市場交換型の神仏祈願の流行にみられるような、神霊と人間の関係の変化がそれに伴ったこともまた明晰に指摘した。

成果の第2は、18世紀後半には娯楽のなかにあった妖怪が、19世紀前半までには「私」の内面に棲みつき、体験する対象へと変貌していったことを立証したことである。具体的には、三遊亭円朝『真景累ヶ淵』、月岡芳年『新形三十六怪撰』、福来友吉の「千里眼事件」などを取り上げて、「神経・催眠術・心霊」といった概念で、近代の妖怪観の特異性を論じた。

これらの成果から、現代大衆文化のなかの妖怪文化に、近世の〈表象〉としての妖怪、近代の個人に〈内在化〉された妖怪に加えて、柳田が採取したような〈民間伝承〉のなかの妖怪の3種が混交していることを論じ、現代妖怪文化論に新たな展望を示すことに成功した。

ただ、本論文では近世から現代までの妖怪観の変遷を統一的に説明しようと急ぐあまり、戦中・戦後期の妖怪観に関する資料収集、論述がやや手薄になってしまった観が拭えない。とはいえ、それは本論文の主眼である近世後期についての明晰な論旨を損なうものではない。

本論文は今後の妖怪文化研究者が読むべき基本文献のひとつになるだろうと評価でき、その学術的意義が十分に認められるものであり、学位取得論文に値すると判定する。